

平成 29 年度  
入 学 試 験 問 題

第 3 回

国 語

- 1 問題用紙は監督者<sup>かんとくしや</sup>の指示があるまで開いてはいけません。
- 2 開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入して下さい。
- 4 特に指定のない場合、記述で答える問題は、句読点<sup>くとうてん</sup>や符号<sup>ふごう</sup>を一字として数えるものとします。
- 5 問題は 1 ページから 12 ページまであります。

受 験 番 号		氏  名	
------------------	--	------------	--

一次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 確かによく言われるが、創造性には、それが必要な時代と必要でない時代がある。今までは、たまたま必要がなかったから創造しなかっただけで、必要が出てきたら日本人もやるだろう、と思う。

それからもう一つ、そういうときに、日本人とか何国人とかに分けるのは自意識過剰で、人間全部一緒ではないか、という言い方もできる。たまたま二〇世紀のアメリカでは創造性が必要だった。あるいは、創造性がばかに儲かる段階にアメリカがいた。そのアメリカも、いずれまた変わる、と考えたほうがいい。

② \*五〇年前、戦争中の日本は創造性奨励時代だった。というのは、昭和一四年に日米通商条約が廃止になって、アメリカから特許権が買えなくなつた。昭和一六年には、国交断絶で戦争になると真似もできなくなつた。そこで突然、創造性が奨励された。個性教育が必要だとか、天才はいないか、と言っていたのが思い出される。

③ 中学一年生の、天才らしき子供を山奥に集めて、彼らは戦争に行かせないなんていうこともあつた。また、子供の雑誌でも、飛行機は日本人の二宮忠八という人が江戸時代に発明したとか、日本人でもこんな驚くべき発明をしたという話がたくさん載つていた。

戦後は、そういう傾向はぱったり止まって、会社の上からの指示も、写真機を持つてアメリカへ行つて何でも写してこい、になつた。そして、写してくると「とにかく、これと同じものを早くつくれ」である。わが社で発明するより、そのほうが安上がりだし、時間もかからない。日本は賃金が安いから、その分だけは必ず儲かる——だった。

そういう中では創造性のある人は出番がない。どうしても創造したい人は、アメリカへ行つてしまふ。中小企業の中には、ソニーやホンダのように、創造性で成功を目指した人もいるにはいるが、大方の日本人にとって、創造性は不要だった。

もし、これから創造性が必要になれば、おそらく創造性のある人が出てくると思う。ただし、それにはどうやって創造性を見分けるのを考えてはいけない。

そこで一つ提案したいことがある。創造性にも初段、二段、三段というのをつけてはどうか。四段以上になると、もう創造性とは凡人には見えない。それは狂気と「紙一重」である。では、三段がつけられる創造性とはどういうものか。

かつて、創造性を強調している有名な大学教授にこう聞いたことがある。「業績のない天才についてお考えになつたことはありませんか?」。するとその先生は、「そんなものはない」と言つたので、これは意外に分かつてない人だと思つた。

業績というのは、世に認められたということである。それは創造性でいえば二段ぐらいだろう。たとえば、アインシュタインが相対性理論を言つたときは誰も認めなかつた。そういうふうにならざるに本當の創造性というのは、その人が言い出したときには世に分かる人がいないから、

業績にはならないわけである。

実は、その先生も大きな発明をしたが、発明したとき日本では誰も認めてくれなかった。それが一〇年くらいしてアメリカで認められて「天才」と呼ばれるようになった。その間は、その先生も自分の力を持って余していたはずだから、「本当の天才のしたことは、なかなか業績として認められない。業績になるまでがたいへんだから、私はそういう人を育てている」とでも言っておきながら期待していたのだが……。

いずれにしても、人がすぐにほめてくれるようでは大したことはない。初段か二段がその世界である。三段くらいになると、世間からの評価が自分お預けになる。そうすると、「日本人に創造性がないとよく言われる」といつても、今認められていないだけで、いずれ将来はたいへんな評価を受けるものが潜<sup>ひそ</sup>んでいる可能性がある。

そのことをおそらく本人は分かっている。つまり、既存<sup>きざん</sup>のものでは飽<sup>あ</sup>きたらないから本人は何かをつくったのだから、その前途<sup>まぜんと</sup>は、世間は分からなくても本人には分かる。

学者がなぜ楽しいかというところ、学問というのは階段ができていて、自分で「一段積み上げたな」ということがまず分かるし、さらに後から必ず誰かがそれを分かってくれるのである。だから何かをつくったら、そのとき世間から評価されなくてもいずれは分かってもらえると思つて、「ああ、できた」と本人だけが思つていてもいい。それを、賞をもらったの、もらいそこねたのと言つている学者を見ると、「何だ、ほめられたいのか。それじゃあ学者とは言えない」と言いたくなる。そんなのは創造性では初段くらいの人である。

サラリーマンは、いくら良いことを仕上げたと思つても、上が認めてくれないのは日常茶飯事<sup>にちじょうさはんじ</sup>。学者のように書き残しておけば、後でその創造性に誰かが気づいて日の「        」を見るといふものではない。そこがサラリーマンの創造性の辛<sup>つら</sup>いところである。

だから日本人の創造性は見えにくいのであつて、ないのである。ところがサラリーマンの創造性の話をしているのは、魚が鳥の話<sup>⑦</sup>をしていふようなものである。

創造性ある人を求むとか、育成するとか、会社の求人広告には書いてあるが、大企業の人事部にそんな人はめつたにいないと学生は心得ていて、先生、これはひっかけ問題で、本当に創造性があるところを見せたら、協調性がないとして落とされるのではないでしょうかと聞く。⑧お前は想像力があるな」とほめておいた。

(日下公人「裏と表から考えなさい」より)

(注)

\* 自意識過剰……他人が自分をどう見ているかを気にしすぎる状態。

\* 奨励……ある事柄を、よいこととして、それをするように人に強く勧めること。

\* 傾向……物事の状態・性質などが全体としてある方向に向かうこと。かたより。

\* 既存……すでに存在すること。

\* 前途……行く先。将来。

※ この文章は一九九九(平成一一)年に出版された本に収められた文章です。

問一

①「確かによく言われるが、創造性には、それが必要な時代と必要でない時代がある。今までは、たまたま必要がなかったから創造しなかっただけで、必要が出てきたら日本人もやるだろう、と思う」という筆者の意見は、日本人に関するどのような評価に対して述べられたものだと考えられますか。その内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 創造性が必要だと考える日本人は少ない。

イ 日本人にはもともと創造性がない。

ウ 現代の日本人に創造性は不要である。

エ 日本人にも創造性はある。

問二

②「中学一年生の、天才らしき子供を山奥に集めて、彼らは戦争に行かせないなんていうこともあった」とありますが、このような政策をかつての日本が考えなければならなくなった原因は何ですか。三十五字以上四十五字以内で答えなさい。

問三

③「写真機を持ってアメリカへ行って何でも写してこい」とありますが、会社はなぜこのような指示を社員に出したのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 敗戦によって、日本人はアメリカ人の創造性にはとうていかなわないと思いつたから。

イ 戦後の貧しい日本企業は、アメリカ人の気に入る製品を作らなければ儲からなくなったから。

ウ アメリカ製品のコピーを作って、時間も手間もかけずに利益を上げようとしたから。

エ 日本人のプライドにかけても、品質面でアメリカをしのぐ製品を作る必要があったから。

#### 問四

□ に当てはまる言葉として最も適當なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア ないのではなくて、必要がなかった
- イ 不要だったとみせかけ、必死に求めている
- ウ ないというより、ないふりをしていた
- エ 必要か必要か、結論は出せないと考えた

#### 問五

—— ④「意外に分かってない人だと思った」とありますが、筆者はこの教授がどういうことを「分かってない」と思ったのですか。その内容として最も適當なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア この教授自身が数少ない天才の一人であるということ。
- イ 創造性は時として狂気きやうきにもなりうるということ。
- ウ 創造性のある人と創造性のない人をどう見分けるかということ。
- エ 創造性が高すぎて業績をすぐに認められない天才がいるということ。

#### 問六

—— ⑤「日の」「を見る」の「」には、体の一部を表す漢字一字が入ります。その漢字を書きなさい。

#### 問七

—— ⑥「サラリーマンの創造性」は、どういう点で学者の創造性とちがいますか。三十字以上四十字以内で述べなさい。

#### 問八

—— ⑦「魚が鳥の話をしているようなもの」とはどのようなことをたとえた表現ですか。その説明として最も適當なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 事情を知らない部外者が、仲間内の話に割り込んでくるようなこと。
- イ 二人の価値観ちかが違いすぎて、話がまったくかみ合わないようなこと。
- ウ 無知な人間が、いかにも専門家気取りの言動をしているようなこと。
- エ 本で得た知識が、すべて現実世界で通用すると信じているようなこと。

問九 ——— ⑧ 「お前は想像力があるな」とほめておいた」とありますが、この学生はどのように「想像」したと考えられますか。適当

でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 本来、創造性と協調性は両立しにくいから、企業の求人広告をうのみにすることはできないぞ。
- イ 企業は、求人活動において学生たちの意表を突く方法でその人間像をさぐり当てようとしているんだな。
- ウ そもそも企業は「創造性」の意味を十分に理解した上で、求人広告を作っているのだろうか。
- エ 企業の人事部に、学生の創造性を見ぬくだけの創造性ある人間がたくさんいるとは思えないよ。

## 二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

小学校も終える事が出来ずに、小さい時から工場通いをし続けてきた兄が、工場の帰りにカバンを買って来てくれた。A社の給仕ききょうじに出ている二番目の兄がそれへ名前を書いてくれる。

そうして明治何年かの四月一日、母はいそいそした私の手を引いて小学校の門をくぐった。私はきつと、次兄の着古した紺飛白こんひやくの縫い直したのを着、新しいごわごわの袴はかまと、新しいカバンと新しいぴかぴかする帽子ぼうしをかぶって、しかし、傍はたの者から見た私の姿は、袴にはかれ、帽子にかぶられ、カバンにさげられていたに違ちがいない。きつとその日はよい天気であつたらう。

父は体が弱かつた。八、九年も、同じ印刷所の校正係けいりをつとめていた。その間に、他の仲間達はどんどんよい位置しを占め、社も発展して行つた。しかし父はいつもガラス戸のはまつた寒①い、暑い校正室けいせいしつの中で、赤い筆しつを持っていた。

——私はよくそこへ、夜業やぎょうのある時などにお弁当を届けに行つた。蚊かをつぶした新聞紙しんぶんのようになった、校正刷たくりりが沢山たくざんあつて、印刷所特有とくゆうの、鉛なまりや、紙かみや、インキの湿しめつた臭においが、薄暗うすくらくなつた狭せまい室へやの間にただよつていた。

明り取りのすりガラスが鉛色なまりいろに明るく、夕暮れのもつ蒼あおさに透すいて、やせた父の頭あたまの上に四角しかくくあつた。

「とうさん、ほんの一寸ちよつとしか箸はしをつけなかつたんだが、お前まへたべないか」

ある時②（あるいは二、三度ばかり）父はそう言つて、昼ひるに弁当屋べんとうやからとつた弁当の残のこりりを差し出したことがあつた。平生へいぜい私は、父をけちんばだと思つていた。父がけちんばなのを考えると悲かなしくなることもあつた。薄暗うすくらくなつた室へやの内うちで父の視線しせんと私の顔かほが合あつた時、私はそれをよけて不機嫌ふきげんに言つた。

「たべない」

私は憂鬱ゆううつになつた。どうしてこんなことをする父であらう。残のこりつたものなんか、さつさとやつてしまえばよいのに。私は横町よこまちの家へ帰つてからも、つまらなかつた。

家からその印刷所へ行くまでの十五分ばかりの道に、そこには活動写真かつどうしやなどもあるのだが、五日おきに縁日えんいちがたつた。恰度ちやど、お弁当べんとうを持つて行く日が縁日えんいちであつたことがある。縁日えんいちには、近所きんじよの子供達こどもたちが申し合わせたように、二銭にせんずつ貰もらうのが例れいであつた。私も、昼間ひるまのお小遣こづかいを貰もらわないかわりに二銭にせんずつ貰もらつた。その日はお弁当べんとうを持ってそこへくるまで、縁日えんいちを忘れていた。無論もちろん、昼間ひるまの分ぶんはつかつてしまつた私は、はつとした。母はもう一銭いちせんしかくれない。皆みなが二銭にせんずつ持っているのに、自分おれには一銭いちせんしかないという事は、どんなに寂さびしいことであらう。

「父にねだつてみよう」

道を歩きながら私は考えた。それはかなり言いにくい、望みの無いことだった。父はけちんぼだったから。

包みからお弁当を出して、もじもじしていたが、思い切つて言つてみた。父はがま口から二銭銅貨を出して、私の手の平へのせてくれた。あの大きな重い二銭銅貨を。(こんなことであつたせいであろうか、今でもあの不便な二銭銅貨は、ひと昔とでも言つたような懐しい重みを持つているように感じられる) そうして、その夜は大尽にでもなつた気で縁日を歩き廻つた。

父は小心な、曲がつた事の出来ない(しかし道で拾つたぼつちりの金ならば、そつとしまつておくような)ほんとうの小人であつた。不孝者の私は父を吝嗇な人と思つていた。しかし、父はそれより仕方なかつたのだ。父は咳が出た。それには永い間葉がいつた。それに、私達のような暮らしをしている者には、明日の保証が一寸もないのだ。殊に父のような病弱な人には、その感じが強かつたであろう。

「もし明日にでもどうかしたら……」

何事に対してもまず父の頭へはそうした言葉がひらめいたであろう。父は少しずつ、少しずつ、恥ずかしい程少しずつ貯蓄をした。

頬のこけた、髭をはやした顔、そうして自分で染め直した外套を着て、そろそろ、そろそろ、下駄を引き摺るようにして歩いてくる父の影が、私の心へ蘇える。それは、もうかなり病いが重くなつてからの姿だ。父はいよいよ動けないという日まで勤めた。

虎ちゃんという、いつも頓狂なことを言つて笑わせる私の友達の八百屋の子は、私達の仲間の前で突然こんなことを言つたことがある。

「たつちゃんとお父つあん、偉いんだつてさあ！」

「何故？」

仲間達の顔と顔を見比べる虎ちゃんの悪戯な顔を、私は薄気味悪く、そして間が悪るげに見詰める。

「だつて、髭をはやしているんだもん！」

そう言つて虎ちゃんは、げらげらと高笑いをする。

「ちえつ！ 髭をはやしているもんはどうして偉いの、ええ、虎ちゃん」

私は激しい恥辱を感じて突掛かつて行く。すると他の仲間が、とぼけた事を言う。

「あたい、髭をはやした電車の運転手を見たことがあるよ」

そう言う私達の、子供らしい皮肉のまじつた会話は、私の父が大儀そうに社から帰つてきて、私達や仲間の傍を通つて行つた跡の、夕暮れの中で交わされたような気がする……。

(中略)

その明治何年かの四月一日の夜、私達一家はお膳をとり囲んでいた。話題は私の初登校のことであつたらう。父は時々酒を飲んだ。その夜も一本の酒が父を上機嫌にしていた。「御屋敷の御婆さん」と母達に呼ばれている、昔御殿女中をしていた義母に育てられた父は、酔うと余計に切り口上になつた。私は私が一家の内で大変幸福者であることや、従つて一生懸命に勉強しなければならないこと、皆の恩を忘れ



てはいけない事などを、説き聞かされて涙ぐみながら御飯をたべた。私達の前にはひっそりしたおかずがある。こうした父の説教は一度や二度のことではなかった。私はそれが大嫌いであつた。自分だけがうんと重荷を負わせられているような気がして堪らなく憂鬱になる。泣き虫の私の眼から溢れる涙は貧乏に生まれついたのを怨めしく思う涙で、決して病氣と戦い、生活と戦う父や、一年中手の平のざらざらしている母や、小さな時から工場や会社へ勤めつづけてきた兄達への、感謝の涙ではなかつたのだ。

母は、一同の食事の終わる頃に、私の学校へ着て行く普段着が、余りに汚れていることを思い出した。そして、次兄の古いかすりがあるが、あれではあまりひどいと思うとつけ加えた。母はそれを縫い直してくれようかと言うのだ。父はその紺がすりを見た。それは大分色が落ちていた。父はそれを染めてやるという。母は危ぶんだ。紺がすりを丸染めにしては、変なものになってしまうからだ。しかし父は受け合つた。

「子供の着るものなんか、さつぱりしていさいすればなんでもよいんだ。あした少し早く帰つてきて俺が釜で染めてやる」  
父には、自分のやけた外套を染め直した経験があつた。

狭い台所は、釜から登る湯気で白かつた。たすきをかけた父が、湯気の中で動いている。引き窓を見上げると星がもう光っている。

釜の下では薪がぼうぼう燃えている。釜の中には黒い布と黒い湯とがにえたぎっている。父の手首も黒い。(父は一生懸命になると、よく鼻汁が髭を伝わつた。自分の眼鏡の蝶つがいを外して、細工をした時などの様子が眼についている)

さて、そのまた翌日のことだ。綺麗好きの母が、あれ程よく洗つた釜で炊いた、その御飯はうす黒かつた。  
うす黒い御飯から、もうもうと湯気が上がった。

⑥ 「赤の御飯のかわりだね」

誰かがそんな事を言う。染められた紺がすりは、まだ乾き切らずに竿にかかつていた。

幾日かの後、私はその染め直した妙な紺がすりを着て、一年生の仲間に入っていたことであろう。

私も、「前途有望な少年」であつたのだ!

(注)

- \*給仕……………事務所・役所などで雑用をした人。
- \*紺飛白……………紺地に白いかすり模様のある織物。ここではそういう織物で作られた上着のこと。
- \*袴……………和服の一種で、腰から下に着るもの。
- \*校正……………印刷物の仮刷りと原稿を照合し、内容の誤りを正し、体裁を整えること。
- \*平生……………ふだん。
- \*憂鬱……………気持ちがあふさいで、晴れないこと。
- \*活動写真……………映画の昔の呼び方。
- \*二銭……………一円の百分の一が一銭。ただし、現在とこの当時ではお金の価値が異なる。
- \*大尽……………財産家。大金持ち。
- \*吝嗇……………けちなこと。
- \*外套……………衣服の上に着るコート。
- \*頓狂……………間がぬけて調子はずれである様子。
- \*恥辱……………はじ。はずかしめ。
- \*御殿女中……………江戸時代、宮中・将軍家・大名などの奥向きに仕えた女性。
- \*切り口上……………形式ばったかたくるしい話し方。
- \*蝶つがい……………開き戸や箱のふたなどを自由に開閉するために取り付ける金具。ここでは眼鏡の金具のこと。

※ 問題作成の都合上、原文の表記を一部改めたり、省略したりしたところがあります。

問一

を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 父は出世することなく、くる日もくる日も環境の悪いところで職務に就いていたということ。
- イ 朝晩は冷え込み昼は暑さにさらされる環境下で、父は仕事をしていたということ。
- ウ 冬は寒く夏は暑い場所所四季の移ろいを感じながら、父は仕事をしていたということ。
- エ 父は他の社員より遅れて昇進したが、仕事場が変わることはなかったということ。

問二 ——— ②「私は、父をけちんぼだと思っていた」とありますが、父が「私」に「けち」だと思われるようなふるまいをしていたのは、なぜですか。三十字以上四十字以内で説明しなさい。ただし、理由は二つ挙げることに。

問三 ——— ③「大尽だいじんにでもなった気で縁日えんぢちを歩き廻まわった」とありますが、いつもと同じ二銭を持つていただけなのに、私がこのようない気もちで縁日を過ごしたのはなぜですか。その理由として適當なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア けちだと思つていた父が、実はけちではないことが分かり、うれしかったから。

イ 半ばあきらめかけていたのに、父が二銭を渡わたしてくれ得意な気もちになったから。

ウ 必要以上に重い二銭銅貨を持つていることで、お金持ちになった気がしているから。

エ 昼間のお小遣こづかいはつかつたのにまたお金がもらえ、家が貧乏びんぼうでないと分かつたから。

オ お弁当を届けたお駄賃だちんとして二銭を手にし、自分でかせいだお金だと自覚したから。

カ 昼間小遣いを使つたのに友達と同じ金額をもてたので、引け目を感じずにすんだから。

問四 ——— ④「子供らしい皮肉」とありますが、この一連の会話のどのような点が「皮肉」だと言えるのですか。その説明として最も適當なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 実際には偉えらくはない「私」の父を、髭ひげをはやしているから偉いといつて無邪氣むじゃきに笑わらっている点。

イ 病氣により弱よわっている「私」の父を元氣付けるために、髭ひげをはやしているから偉いとお世辞せじを言いっている点。

ウ 仕事をして疲つかれて帰かえつていく「私」の父を、疲つかれているほど働はたらいているのだから偉いと馬鹿ばかにしている点。

エ 髭ひげを生やした電車の運転手は偉いのに、「私」の父は髭ひげを生やしているのに偉くないと批判ひはんしている点。

問五 ——— ⑤「涙なみだくみながら御飯ごはんをたべた」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適當なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の小学校入学のために力を尽つくしてくる家族へ感謝かんしゃをしているから。

イ 貧乏びんぼうなため入学式の夜にも質素なご飯しか食べられないことを悲かなしんでいるから。

ウ お金がないために、自分だけが家族に期待をかけられることに気がふさいでいるから。

エ 大嫌だいきらいな父に、同じことを何度も説教せきぎょうされることを怨うらめしく思おもっているから。

問六 〓 ア、エの語について、一つだけ他と「な」の用法が異なるものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 小さな      イ 変な      ウ 妙な      エ 前途有望な

問七 〓 ⑥「赤の御飯のかわりだね」とありますが、この台詞からは「私」に対する家族の思いが読み取れます。その説明として最

も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「私」の入学を祝う赤飯のかわりが炊けたことに安心する思い。

イ 黒い御飯という不吉なものを、笑いでごまかそうとする思い。

ウ 悲惨な状況の中でも、笑いを忘れずに暮らそうとする思い。

エ 貧しさの中にあっても、「私」の入学を祝福しようとする思い。

問八 本文の内容と表現の特徴の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 難しい言葉や漢字を用いることによって、「私」が年齢よりも大人びた性格の持ち主であることが示されている。

イ ( ) の中には「私」のその時の気持ちが表示されており、顔には表れない「私」の思いを知ることができる。

ウ 小学校入学当時に現在の視点から振り返る形で書かれているため、小学校一年生は用いないような難しい表現も見られる。

エ 「……」や「！」を使うことで登場人物それぞれの心情が効果的に表され、各人物に感情移入しやすい表現になっている。

三 次の①～⑧の——部のカタカナを漢字になおし、⑨～⑫の——部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① メンミツに打ち合わせをする。
- ② 道路の真ん中で車がコシヨウする。
- ③ 多くの料理を食べ、舌がコえる。
- ④ キカイ体操の選手になりたい。
- ⑤ リンジニユースが流れる。
- ⑥ 切りカブに腰こしをかける。
- ⑦ ユウビン局に行き、切手を買う。
- ⑧ オークストラでシキをする。
- ⑨ 七五三のお祝いで、美しく装まう。
- ⑩ スタート前に思わず、武者震ぶるいする。
- ⑪ パンダを見ると気持ちが和らぐ。
- ⑫ 異口同音に答える。

